

# 生涯教育課程における英語多読授業の導入

## On Extensive Reading Class in Lifelong Education Course

伊 東 英\*

ITOH Suguru

### 1. はじめに

生涯教育課程が改変されて今年度で3年になる。同課程は当初、生涯教育システム、心理発達、学習情報、健康・福祉スポーツ科学、国際理解、環境教育、芸術教育の7つの研究分野で発足したが、平成17年度に生涯教育システム(生涯学習+インストラクショナル・デザイン)、心理発達ならびに総合言語文化の3研究分野4領域に再編されることになった。その際、総合言語文化研究分野では専攻する学生たちの英語力を強化すると同時に、他にもう一つの外国語を学習する機会を提供し、さらに読書を通じて幅広い教養を身につけさせることを教育目標として掲げることとした。総合言語文化を専攻する学生のためにどのような英語教育が効果的であるかを検討する際に、酒井邦秀の提唱で始まったやさしい英文で書かれた本を大量に読む、英語多読に関する書籍を読む中で、大学での授業に取り入れることができると判断した。

### 2. 英語多読との邂逅

英語多読を推進しているSSS英語学習法研究会によれば、日本語を介することなく(日本語訳をしないで)英文を理解するには、やさしい英語の本を大量に読む必要があると主張している。クラッシュェンのインプット理論を持ち出すまでもなく、外国語を習得するためには膨大な量のインプットが必要であることは言を俟たない。しかし従来の英語講読系の授業では、英文和訳が中心となるため大量の英文を読むことが困難である。しかも酒井が提唱する多読三原則は英語の本を読む姿勢として従来の教授法とは決定的に異なっている。

#### 1. 辞書は引かない

#### 2. わからないところは飛ばす

#### 3. 進まなくなったらやめる

この三原則を守ることは実際にはなかなか困難である。しかし筆者自らが外国人学習者用に編集された英語のgraded readersを読み始めることで、英語で本を読む楽しさを実感できたこと、読書には一定のスピードが必要であり、いつも辞書に頼っていたのでは快適な読書が継続できないこと、興味の持てない本に付き合っている余裕がないこと等を確認できた。実際に英語多読クラスを指導するのは必ずしも英語専科の教員でないこともあるが、その教員は英語を教えるのではなく、英語で本を読むことをアドヴァイスするという立場にあることを認識すれば、まず教員自らが英語多読を試みておく必要があるだろう。

平成16年度に大学図書館にPenguin ReadersとOxford Bookworm Libraryを中心としたgraded readersが600冊程度導入された。これらの図書を有効に使って、英語多読の実践が可能になると思われた。この英語ライブラリーはその後も本の種類を増やしたり、カセットやCDの音声教材を追加したりして充実しつつある。

### 3. 「英語リーディング入門」

平成17年度から「英語リーディング入門」を開講し、今年度で3年目となる。この間手探りで授業を進め、教材としてのgraded readersを揃え、また授業内容を改善することで、当初目的としていた週に2万語の読書を実践することがようやくできるようになってきた。ここでは、これまでの実践を省みつつ受講生の読書量を紹介したい。

#### 3. 1. 平成17年度

最初の多読クラスは、自前のgraded readersを用意できなかったこともあり、大学図書館の

\*岐阜大学教育学部生涯教育講座

学習室を借用して実施した。受講生は10名である。図書館の英語ライブラリーのすぐそばに当時の学習室があったので、授業の前後だけではなく授業中にもすぐに本を探しに行くことができ、便利な反面、学習室は比較的狭く、10名の受講生でいっぱいになり、有効な読書指導や講義を行なうことができなかった。そうした授業時間の指導不足を補うためにAIMS-Gifuの掲示板に授業コメントや質問を書き込むように指示したが、記載内容が統一されていなかったこともあり、上手く機能したとは言いがたい状況であった。

その結果、週2万語の読書を継続できた受講者は10名中僅かに1名であった。(図1、表1) また、全期間を通じて6万語しか読めなかった学生に対しても有効な指導ができなかった。このことによって読書指導のあり方が受講生の読書意欲に大きく影響することになることを思い知らされた。また図書館の本だけを利用した多読クラスの運営が難しいことも分かり、この授業用に新たにgraded readersを揃える必要性にも気づかされた。そのため、岐阜大学活性化経費(教育)に応募した計画が採用されたため、その資金を翌年度の授業のためのgraded

readers購入費用に充てることができた。

学生が掲示板に寄せたコメントを抜粋して紹介する。英語多読の仕方がまだきちんと把握されていないコメントも寄せられている。

学生A：

The Beach 14200語 知っている人は多いと思いますが、またまた映画のお話でした。レオナルド・ディカプリオ主演の映画であつたらしいが不幸にも自分はみたことがなかった。level6の本にも挑戦したこともあり半分までしか読めませんでした。

学生B：

American Lifeは、アメリカの私生活や、映画、スポーツなどアメリカについて様々なことが紹介されていて面白かったです。読書量の報告は今回が最後だけれども、30万語目指して、これからも続けていきたいです。

学生C：

TITANIC!は、映画を見るよりもこっちのノンフィクションの方が好きでした。むしろこっちの方が面白かったです。授業はもう終わってしまうけど、これからも続けていきたいです！

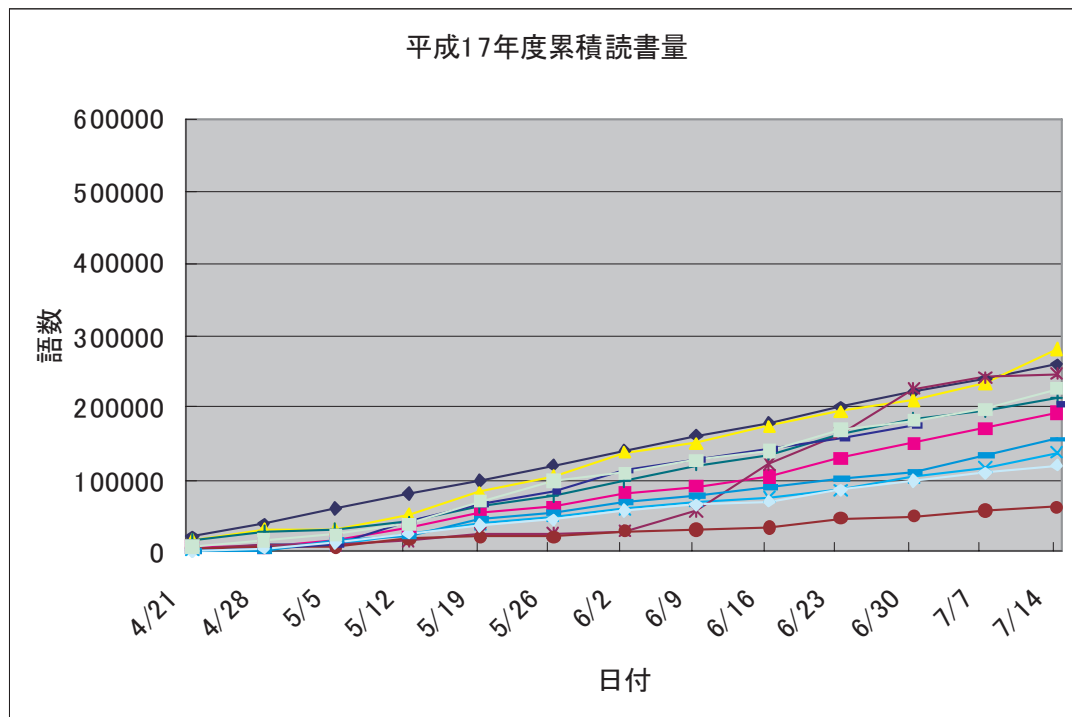


図1 平成17年度累積読書量

### 3. 2. 平成18年度

2年目は活性化経費を得て教材のgraded readersを授業用に揃えることができたため、教室で貸し出す本と、学生が図書館で利用できる本があり、両者合わせると1000冊以上となり、授業外での読書の環境が整った。特に授業開始後一か月ほどの期間は易しい読み物に受講者全員が集中するため、前年度の場合には借り出す本がなくなってしまうケースもあったが、この2年目からはそういう事態を避けることができた。

また、AIMS-Gifuの掲示板利用にあたっては授業コメントと読書量報告を別のフォーラムに投稿することで、掲示板記載事項が明確になり、互いのコメントを読む際にも楽になった。また、1年目は授業を図書館の学習室で行なったことが失敗であったが、今回からは一般の教室を用いることになり、PCを教室に持ち込んで教材をスクリーンに映し出しながら講義することも可能となり、多読の意義を解説したり、またAIMS-Gifuの利用法を確認したりする上でも効果的であった。

こうした環境の変化にともなって、受講生の累積読書量も1年目よりは増えてきて、最終的

に週2万語の読書を達成できたのは、全受講者16名中の6名であった。また受講者1名当たりの平均読書量も大幅に増えた。(図2、表1)

授業の最後に学生から寄せられたコメントを抜粋して紹介する。

学生D:

今日で最後の授業でした。いままで多読を行って、なかなか本を読むのに取り掛かれない時もあったけど、なんとか20万語達成できてよかったです。

学生E:

多読を続けるのは結構大変で、根気も必要だったけど、やっぱり小さなことでも「継続は力」だなんて思った。

学生F:

この授業をとったものの最初は、本当に毎週二万語も読めるのだろうかって心配していましたが、読み出すとすっかりその世界に入り込み、多くの素敵な本に出会ううちにいつの間にか、ほぼ毎週二万語を超えていました。

この授業は、みんなや先生とたくさんコミュニケーションをとることができ、楽しかったです。また、先生には私たちにとってためになる

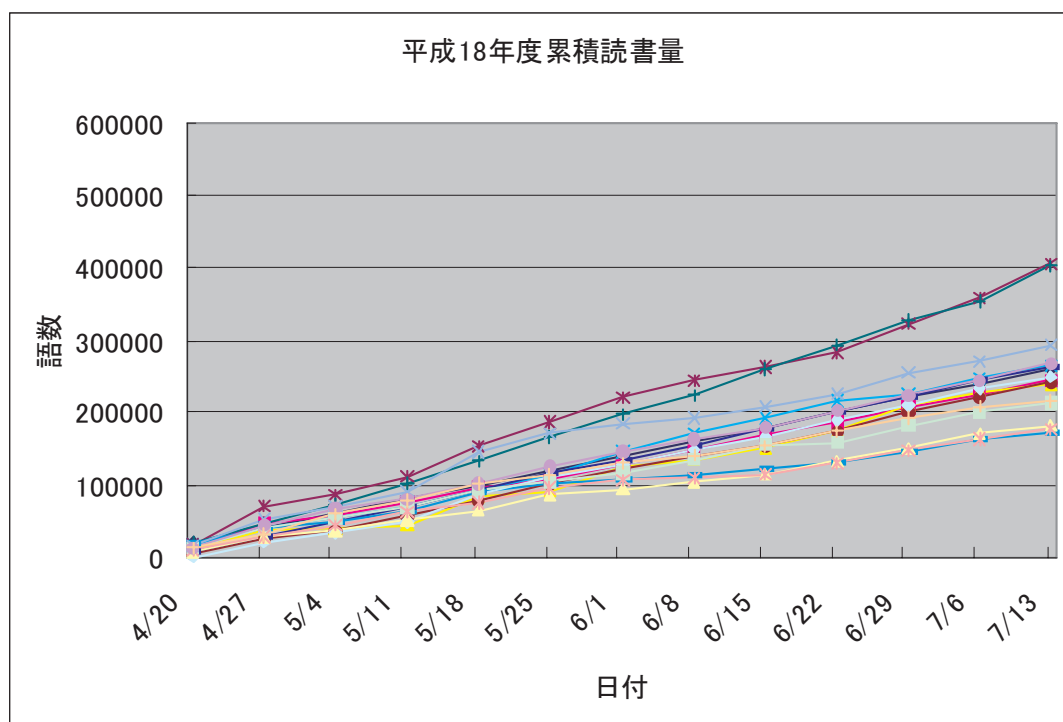


図2 平成18年度累積読書量

話を多くしていただき、益々英語に興味を持つようになったのも事実です。

### 3. 3. 平成19年度

本年度は多読クラスの3年目である。昨年以上に多読用graded readersの種類を増やすことができたこと、CDの朗読付きのgraded readersも教室で紹介できたこと等、教材の充実に加えて、AIMS-Gifuの掲示板への投稿も、授業コメントと読書量報告に加えて今回から毎週読了した本の中から他の受講生に宛てて推薦図書を選んで簡単な紹介をすることとした。これは学生にとっては読書以外の負担が増えたことになるのであるが、クラス全体としてのコミュニケーションが昨年度以上にすることができたために、累積読書量も大幅に増大した。その結果、今年度は週2万語を受講者25名のほぼ全員が達成し、達成できなかった2名も僅かに足りないだけであった。このことにより、目的を共有した英語多読コミュニティが形成されると、クラス全体として効果が上がることが確認できた。(図3、表1)

昨年度は授業終了時に40万語を突破した学生が1名いたが、今年度は昨年度終了時と同じ13回目で40万語を超えた学生が3名存在し、うち1

名は50万語を超えていた。また平均の累積読書量も昨年度を大きく上回っている。多読コミュニティが成立して上手く機能すると、個人としても、またクラス全体としても累積読書量が増大することが判明した今、この多読コミュニティの形成を今後も十分意識的に行なっていく必要がある。

今年度も受講生から多くの貴重なコメントを寄せられたが、多読の意義について、あるいは読書行為そのものについての意見を抜粋して紹介する。

学生G：

私は英語はあまり好きな教科ではなくて、英語なんて見たくない！！と思っていましたが英語の本を読むことは楽しかったので、これからも続けていきたいと思います。

学生H：

この授業で多読とともに、読書の大切さも学びました。時間が十分にあるのは学生である今しかないのだから、様々な本を読んで教養を幅広く身につけ、成長していきたいと思いました。

学生I：

私は英語が苦手でした。特にリーディングは、

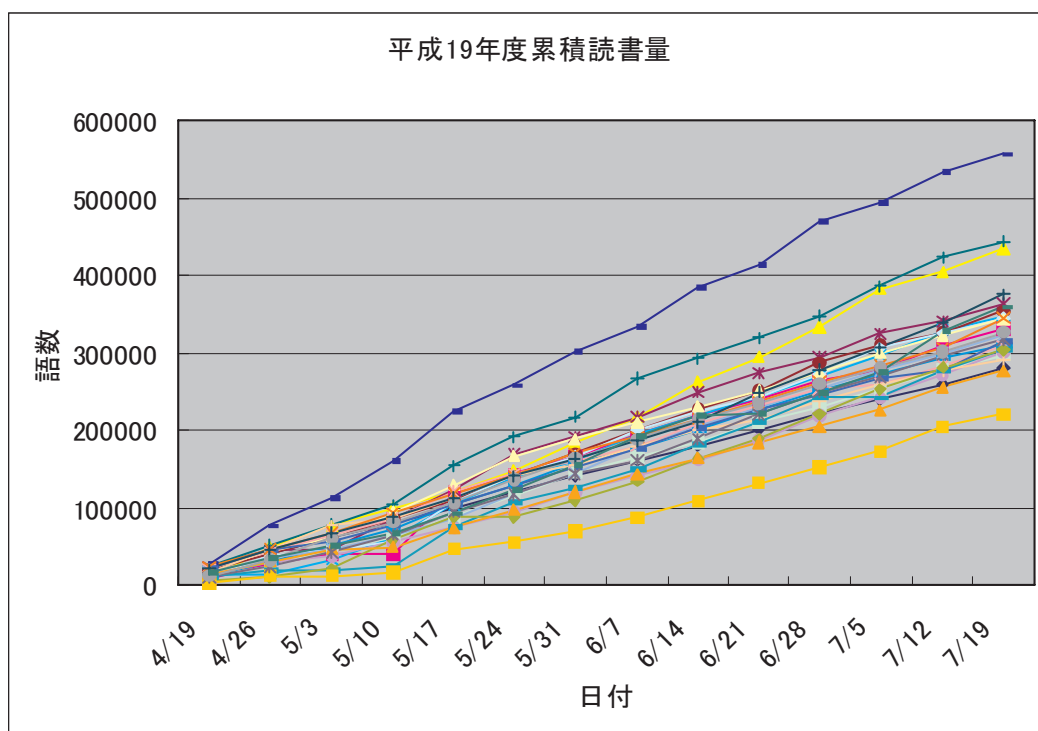


図3 平成19年度累積読書量

表1 「英語リーディング入門」 累積読書量

	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成19年度
受講者総数	10名	16名	25名	25名
週2万語達成者	1名	6名	23名	23名
標準累積読書量	260,000語	260,000語	260,000語	280,000語
平均累積読書量	183,348語	252,534語	315,042語	339,425語
最高累積読書量	280,000語	404,280語	534,241語	556,484語
最低累積読書量	61,580語	170,400語	203,946語	220,230語
報告期間	13週	13週	13週	14週

注：平成17年度、18年度は授業が全体として14回実施されたので読書報告は13週分、平成19年度は授業が15回実施されたので報告が14週分ある。

読むのにかなり時間がかかり、挙句の果てには途中で嫌になってしまうというくらいでした。最初は、そんな私が1週間で2万語なんて読めないと思っていました。それでも、この授業をとると決めたからにはノルマは達成したいと思い、読みました。慣れるまでは大変だと感じる時もありましたが、週を重ねるごとに少しずつではあるけれど、リーディングが以前よりも苦手だと感じるものが少なくなりました。さらに、自分がこれくらいの英語の本（といっても、せいぜいレベル2くらいですが）なら読めるということがうれしく感じました。今日まで英語の本を読んできて、まだまだ得意とまではいきませんが、確実に以前よりも読めるようになっていくと思います。

#### 4. 評価と課題

これまでに3年間の英語多読授業の実態を見てきた。結果としては今年度に至ってようやく当初の目的がほぼ達成されたように思われる。そのためには教材のgraded readersを揃えること、授業中に適切な指導を行なって英語読書へ誘うこと、適度な負荷をかけた週間読書量を設定すること、授業や自らの読書について報告をすることで多読を意識化すること等が徐々にできるようになってきたためであると判断される。

英語を直接的に教えるわけではない担当教員の役割は、いかにしてクラスを英語多読コミュニティとしてまとめていくか、ということに集約されるのではないか、ということがこの3年

間の実践を通じて体感できたことである。また、読書は自律した学習者を養成する有効な手段であり、日本語であれ英語であれ、読書習慣を1年生のうちに身につけることができれば、その後の学生たちの大学生活にも大きく資するところがある。

今後はさらに英語多読に関する理論面と自らの実践面で研鑽を積み、有益な英語多読クラスの運営に関する研究を進めていきたい。

#### 参考文献

- 1) 酒井邦秀 (1996), どうして英語が使えない, ちくま学芸文庫
- 2) 酒井邦秀 (2002), 快読100万語! ペーパーバックへの道, ちくま学芸文庫
- 3) 酒井邦秀・神田みなみ (2005), 教室で読む英語100万語, 大修館書店
- 4) 英語教育 (2004年2月号), 大修館書店